

総合討論

司会 総合討論の前にご紹介したい方がいらっしゃいます。フロアにお見えの山下勝男さんです。山下さんは、東方政策が開始されたときにマレーシア大使館の担当の書記官でいらっしゃったということで、その当時の事情を含めて、この政策が始まる時期の様々な裏話と言いますか、この政策の立案・実施にまつわるお話をお聞かせいただければと思います。山下さんは、外務省時代にはパプアニューギニア大使をお務めになられて、現在は日本パプアニューギニア協会の会長をしておられます。

■ 政策が始まった30年前を振り返ると わき上がる隔世の感

山下勝男(日本パプアニューギニア協会/元パプアニューギニア大使) ただいまのご紹介の中で一点だけ誤りがあります。私はルックイーストが始まったとき外務省の山本課長が現在おられる南東アジア課にいてマレーシアを担当しており、全くの最初からルックイースト対応をやっていました。今日はマレーシアサポーターの一人として参加させていただきました。

ルックイーストの役割とか日本とマレーシアの二国間関係の進展ぶりとかについての議論を聞いていて、かつてはマレーシアがASEANの五か国の中で最も知名度の低い国でしたので、それから比べると隔世の感があるという感じがします。それもひとえにルックイーストポリシーが果たした役割ではないかと思っています。30年が長いのか短いのかは議論の余地があるでしょうけれど、30年も続いて、しかも依然としてルックイーストポリシーが熱く議論されているということは、私にとっては非常にうれしいことです。

私は1966年に外務省の派遣でマラヤ大学に入学しました。その頃からすると今の関係は本当に隔世の感があります。どうして二国間関係にこう大きな影響を与えたのかという理由はいろいろあると思いますが、提唱者であるマハティールさんの強力なリーダーシップが一方にあると思います。日本の企業倫理とか労働者の規律、会社に対する忠誠心を学びたいとマハティールさんは当時言っておられました。そうすることでこれまで続けてきたのだと思います。

山本課長は、最近では日本側にとってもマレーシア側にとってもルックイーストポリシーに対して冷めた感じがあるのではないかと言われましたけれども、私は当然な話だろうと思います。一つ目として、提唱者であるマハティールさんが現役を退かれたことは大きな転機だろうと思います。二つ目は、日本の企業倫理とか労働者の会社に対する忠誠心とか、規律とか倫理については、過去20年ぐらいの間に日本のいい点が徐々に失われていって、そういう点で日本に学ぶことはあまりないのではないかと思います。

■ 財官学協力のモデルケースとして 双方に利があるかたちでの継続を

山下 これまではマハティールさんがリーダーシップをとって日本に対する期待や希望に対して日本側は受身の姿勢でやってきました。私は今でも忘れませんが、1981年に外国から帰ってきて、マレーシア担当はマハティールさんのルックイーストポリシーだと言われて現場でおろおろしました。

まず留学生を100人単位で、ジョブトレーニングは1,000人単位で受け入れてくれと言われて、日本はお役所の前例主義が強いものですから、留学生については文部省、研修生についてはJICAを通じて対応しようとしたのですが、それぞれ担当の部局に笑話にされて、「そんなことできるわけがない」と言われて、本当に途方にくれたことがありました。それでも日本商工会議所とか企業に頭を下げて回ったりしたことを思い出します。それこそ財官学の協力で、ものごとが少しずつ進むようになって現在にいたっているのだらうと思います。財官学の協力のモデルケースとして、過去に携わってきた人については非常に誇りに思っているのではないかと思います。

願わくは、簡単に終わらすのはもったいないなあと。そういう意味では、今度は日本側が、さっき課長が言われたように、それこそ相互協力というのは双方に利益がないと長続きしないわけですから、ルックマレーシアで日本側にも利益になる、マレーシアにとっても参考になるということによって活路を見出していくべきじゃないかなという気がします。

司会 ここからはフロアにオープンして質問をお受けしたいと思います。

■ マレーシアでは日本の占領と 第二次大戦について見直す動きはないのか

田村慶子(北九州市立大学) 私の質問は、一つは東方政策そのものについての質問ではないので、もし他の

方の質問のあとで余裕があれば、どなたでも感じたこととお答えいただければと思います。日本の占領や戦争の記憶のことです。去年の9月からこの夏までシンガポールにいました。ちょうどシンガポールが変わっていくところにちょうどいたのでラッキーだったと思うんですが、シンガポールでは、日本の占領や戦争についての記憶をもう一度考えなおしてみようという動きが去年から盛んでした。

中国が台頭してきて、かつ日本の経済力が落ちてきていて、日本があまり重要な国ではなくなってきたということと、シンガポールの言論の自由が随分進んできているということと、リー・クアンユーというカリスマが今まで日本の重要性ゆえに抑えてきたことがそうではなくなってきたことなど、いろいろな理由があると思います。とにかく例えば「Nanyang volunteers」と呼ばれる当時のマレーやシンガポールでトラックの運転手として東南アジアの物資を中国に運んでいた人達のことを問いなおしてみようとか、そういうことがいくつも始まっているんです。そういうことに対して日本は何もしなくてもいいのか、日本はどう受け止めるんだろうということを自分の一つの大きな課題として日本に帰ってきました。

このようなことはチャイニーズの世界ですので、あまりマレーシアでは大きな問題にならないのかなと思います。マレーシアでは日本の戦争や占領の記憶を見直す——今年はちょうど50年でもありますから、そういうことについての動きがあったのかどうか、もし何かお考えがあればと思います。

■ ハラルについての対応を進めてもらうには どのような方法をとればよいか

もう一つはプラクティカルな話で、先程のハラルの話は私も本当にそう思いました。私が住んでいる北九州には、主にインドネシアからの研修生が150人ぐらいいます。それから九州工業大学という国立の工業大学があって、そこにムスリムが家族を含めて200人近くいます。

やはりハラルをどうするかということが食品で大きな問題になっていて、私は市の国際担当課の会議があると、いつも「行政としてハラルも含めたムスリムの食生活に関することを推進してほしい、そうすればもっと北部九州にムスリムの観光客も含めていっぱい来る」と言っているのですが、なかなか取り上げてもらえません。どのようにすればいいのか、起業家の立場からアドバイスをいただければと思います。

■ 日本とマレーシアとで

第三国への輸出をする具体的事例があるか

横山久(津田塾大学) 私は1980年代のクアラルンプールにいて、久しぶりに当時のお話を伺って大いに知的刺激を受けました。

アクマルさんと穴沢さんにお伺いします。そもそもルックイースト政策は官民連携と省庁間連携というところから話があったと思います。穴沢先生には、第三国への輸出なり進出をお考えになっているとお話しいただきました。私は開発経済学を勉強していて、最近の重要なトピックとしてBOP、つまりBaseline of the PyramidあるいはBottom of Pyramidがネクストマーケットだと言われていますが、両国が第三国に進出していくときにそういう具体的な例があるのか、あるいはその可能性はあるのかを、アクマルさんと穴沢先生にお伺いしたいと思います。

■ 思想史の観点から見て

ルックイースト政策とはなんだったのか

富沢寿勇(静岡県立大学) 私も約30年前、つまり1981年から83年に当時の文部省のアジア諸国派遣留学生でマレーシアに行きましたが、当時は私も含めて同プログラムでマレーシアを選んだ人は過去に散発的に3人ぐらいしかいなかったもので、ほとんどマレーシアに目を向ける人がいなかった時代ということになります。そのようなときに私は「ルックマレーシア」をしまして、向こうに行った途端に82年から「ルックイースト」が始まったということで感慨があります。

そのルックイーストについて本日は日本側からの視点が中心に議論されていますが、ここで改めて伺いたいのは、ルックイーストがマレーシア側にとってなんだったのかということです。特に思想史的に見てどうかということで、ウエスト対イーストというところでイーストが強調されているというのは確かにそうで、ポストコロニアルな思考から脱却するという大きな考え方も反映したかと思いますが、勤労の倫理や思想や価値観、これが非常に強調されたということがあったと思います。そこに「日本や韓国の」という修飾語がついてはいますが、とにかく倫理とか精神面がかなり強調されたということが重要だと思います。

■ 「アジア的ルネッサンス論」の延長線上に

イスラム化政策、ハラル産業があるのでは

富沢 それと、ハラル産業についてアクマルさんがお話しになっていましたが、例えばイスラムの開発論でマハティールも、また彼と一時ずっとコンビを組んで

いたアンワル・イブラヒムのアジア的ルネッサンス論の中でも、「倫理や宗教あるいは精神面の豊かさと世俗的な開発とが車の両輪となって発展していかなければいけない、これがアジア的な価値なのだ」というかたちで議論されました。

アジア的ルネッサンス論においては、その場合の宗教とは——先ほどリー・クアンユーの話が出ましたが、イスラムでも儒教でも仏教でもいいし、とにかくアジアはいろいろな宗教や倫理伝統があって、宗教的、倫理的な価値と世俗的な物質生活を、片方が損なわれないようなかたち、つまり西洋的な近代化とは違った開発の枠組が構想されたということがあります。

アンワル・イブラヒムとマハティールがその後決裂したりしても思想的には共通したものがありました。その思想史的延長線上に現在のハラル産業があり、それはイスラム的な価値規範に基づいた世俗生活の再編の試みだと私は捉えています。宗教的価値、倫理や道德の維持、それから物質生活の発展を同時にしているということなんです。これが今マレーシア政府がかなり力を入れてやっているハラル産業につながっているのではないかと考えます。

要するに、ルックイーストもイスラム化政策も、ハラル産業振興政策も、精神性や倫理性を強調してきた側面において、認識論的に見れば、時代の思考枠組みを共有してきたのではないかとともに思います。このような意味で、思想史的に見てルックイースト政策は何だったのか、前にいらっしゃる方から何かコメントがありましたら伺いたいところです。

■ ハラルツーリズムは基盤なく普及可能か、

日本企業と協働で海外進出する展望はあるか

富沢 もう一つ、特にアクマルさんに伺いたいのは、ハラル産業、特に今日ハラルツーリズムの話をおっしゃいましたが、北海道のスキー旅行を扱う観光会社とか、大阪ホテル業界とかレストランではハラル化を進めているわけです。私の当初の考えでは、ハラルツーリズムはハラル産業のいわば「インフラ」の部分が整わないと難しいであろうというものでした。ハラルツーリズムは応用問題で、例えばハラル食品だとかハラル薬品だとか、その他ムスリムの日常生活必需品に相当するなものが一通り揃った上でハラルツーリズムが進んでいくのかなと思っていたら、日本の場合にはハラルツーリズムから一気に入っていったという感じがしています。もちろん、まだ萌芽的な状況ですが、この件についてアクマルさんのお考え、要するに

ハラルツーリズムは基礎なしに日本で普及していくことができると思うかを伺いたい。

アクマルさんにもう一つ伺いたいのは、国内でのハラルツーリズムの問題で、いかに外国人ムスリムを国内に引きつけるかという話だったと思います。他方、先ほど穴沢さんから報告があったように、日本企業が海外に進出する際に、たとえば中国に進出するには、台湾企業と一緒にするとうまくいくというような話がありましたが、アクマルさんは日本の企業とパートナーシップを組んで海外に向けてハラル産業を更に推進していく展望をお持ちか、その辺も伺えればありがたいと思います。

■ セカンドウェーブには

日本のシンボリックな面の再発信が必要では

鈴木絢女(福岡女子大学) ルックイーストポリシーのセカンドウェーブを強調された山本課長と川端さんに質問があります。ルックイーストポリシーにさまざまなアспектがあることは、午前午後のセッションを通じてかなり強調されたと思います。その中でも、シンボリックな、あるいは文化的なアспектも重要だということがマレーシアのジャパン・スペシャリストからよく言われてきました。

非常に高い労働倫理を持ち、勤勉で、高い技術を持つ、そういう国として日本がリプレゼンテーションされてきたのが非常に重要で、そういったイメージをマレーシア国民が広く持っていたことが重要だったのではないかと指摘されてきたと思います。1982年にルックイーストポリシーができて、日本のイメージができたときは、マハティールがアプローチする中で日本をプロパゲートしてくれたようなところがあったと思うのですが、30年経って大きくコンテキストが変わりました。日本の経済的な地位も絶対的なものではなくなりましたし、マレーシアも着実に先進国に向かっていく中進国だし、マハティールの代表的なポスター、いわゆるアンチウエストみたいなポスターも今のナジブ政権は全くありません。

マレーシアの外交も国内経済も国際経済も変わった状況でセカンドウェーブを始めるにあたって、私達のほうから「日本というのはこういう国です」と言っていかなければならないのではないかと。つまり東方政策の第一の波で重要だったシンボリックな側面をどう作り直すかを考えなければいけないのではないかと私は感じました。そんなものは必要ないという意見も含めて、こういった日本のイメージ作りがありうる

のではないかというご意見があれば教えてください。

■ グローバル化の時代における

日本とマレーシアとの協働の理想型とは

留学生 I am from Malaysia National Defense University. On the second phase of the Look East policy, I'm amazed by the opinion by Professor Anazawa Makoto that the model of Japan toward the business in the globalized world. What is your opinion on how we Malaysian also can start, get in this kind of the things, which is the model of collaboration between Japan and Malaysia toward the globalization.

■ 学生として、日本とマレーシアとの 交流を深める手伝いができれば

田村陽太(東京外国語大学マレーシア語専攻四年)

川端さんにお伺いします。川端さんの講演で、マレーシアのルックイースト政策30周年を迎えて、これから日本とマレーシアの交流をどんどん深めようということで、マレーシア、ルックイーストに興味がある人達で意見のすり合わせをして政策をやっていったらいいという話をお聞きしました。川端さんがルックイースト政策を盛りあげていこうと何か考えていることがありましたら、私は現在、東京外国語大学でマレーシア語とマレーシアを研究させていただいてルックイースト政策とかも興味がありますので、何かお手伝いできたらと思っております。お金はないですが時間はあります。

■ 民族バランスの観点から

公共教育への日本人の増加をどう考えるか

小野真由美(早稲田大学) マレーシアに留学された先生方もたくさんいらっしゃるの、全体への質問としてお伺いします。

現在、マレーシア政府観光局がルックマレーシアという日本人大学生・大学院生を対象としたマレーシア留学プログラムを実施しています。こうした動向の中、日本の教育産業や観光産業から「マラヤ大学に日本人が留学できるのか」という問い合わせがマレーシア政府観光局に多く寄せられているそうです。

日本人学生のマレーシア留学を推進する立場である政府観光局側としては、マレーシアのエスニック関係のバランスを考えると、マラヤ大学への日本人留学生が増加することによる影響や、マレーシアの公共教育に日本人留学生が増加することをどのように考えるべきか考慮しているようです。この点に関して、先

生方はどのようにお考えか教えてください。

司会 お聞きした限りでは5人の皆さんそれぞれに質問が投げかけられていると思いますので、順番にお答えいただきます。

■ 日本の優位性のある部分を強調しつつ

日本とマレーシアとの関係を再構築する

山本課長 私には鈴木さんからルックイーストポリシーのセカンドウェーブの文化的なアスペクトの重要性ということでご質問がありましたが、まさしくその通りだと思っていまして、この複雑化した世界で、中国が台頭し、日本の国力が低下している中で、いかに日本というものを、マレーシアにおいて、どうやって深く輝くような存在に維持するかが極めて重要だと思っています。

日本には他の国々よりも優位している部分があるはずですが、東方政策はどちらかというと経済面ばかりですが、クールジャパン、日本のポップカルチャーみたいなものがあると思いますので、できるだけ日本の優位性のある部分を強調しながら東方政策にしても日本とマレーシアとの関係を再構築することが重要です。

ある統計によれば、中国を含めて東アジアの9割が日本のGDPだったという時代もあったわけですが、そういった時代には当然戻れないわけです。しかし、今の時代でも、日本の優位性を生かして日本が光り輝くところはあるだろうし、そういうところを強調していきたいと思っています。

■ イスラムにとって重要な

祈りと食事をどのようにサポートするか

アクマル まず第二次世界大戦については、いろいろな考えがあります。日本がマレーシアを攻撃したのではなくて、日本はマレーシアを白人から解放したと思っていたマレーシア人も大勢いました。嫌な気持ちの人もいただろうけれど、昔からマレーシアは日本を先生として見ていた部分がありました。

ハラル産業に関して、日本でハラルツーリズムが行われていることについて質問がありました。実際に、私たちは北海道で加森グループと提携してハラルの食事を提供しています。弊社では九州にあると畜場でハラル処理して、ネット販売でいろいろな飲食店に販売しています。

イスラムの人にとって何が大事かというと、お祈りできる場所と食事できる場所です。お祈りするところは日本では88箇所ぐらいで、全国のいろいろなと

ころにあります。でも食事は、マレーシアでいう100%ハラルのレストランは日本では無理です。何故ならハラルレストランはお酒を売ってはいけないからです。日本ではお酒を売らないレストランは成り立ちません。だから、ハラルレストランではなくてハラルメニューにします。私たちが食材や原料を調べて、ハラルかどうか確認した上でハラルメニューを出します。

お祈りは、1日5回お祈りしなくてはならないのですが、お昼と夕方は、例えば北海道だったら千歳の近くにあるアウトレットでもお祈りできる場所があります。ホテルでは、イスラムのお客さんが来ればこの時間にこういうお祈りしますっていう案内をしています。お祈りの方向もちゃんと案内しています。

■ 安全安心の基準の一つであるハラルを礎に「モダンイスラム」を目指すマレーシア

アクマル 次の質問で、日本とマレーシアと組んで第三国に商売できるかについては、実際に私たちはもうやっています。宮崎県にあるゼンカイミートという会社と提携して、インドネシアのハラル認証を取ってインドネシアに輸出しようとしています。一つ問題があって、日本はまだ海外から見て口蹄疫と狂牛病から解放されていないので、東南アジアには肉が輸出できません。これは私どもの仕事というよりも日本政府の仕事かもしれません。

マレーシアが目指している国は「モダンイスラム」です。マレーシアの人口構成は、6割がイスラムの人、3割が華僑、あとはインド系日本人がいろいろいますが、ハラルというのはイスラムの人にとって安全安心の基準です。中国人系のマレーシア人もハラルを取り入れて、イスラムと非イスラムにとっての安全安心の基準を守って、マレーシアで国内販売するし、海外にも輸出しています。マレーシアは多民族国家でモダンイスラムを作り、マレーシアより優れていない国、例えば中東、そしてマレーシアより発展していない国、バングラデシュ、インドネシアに輸出、技術移転をしています。

■ マレーシアへの戦後補償と華人コミュニティに対する賠償

吉村 いくつか私の報告に関連するご質問と他の方にお任せするご質問があると思います。田村慶子さんがご質問くださった戦争の記憶、占領の記憶に関しては、私が午前中の第1部でも歴史について触れたのでお答えさせていただきます。

マレーシアにおける戦後の議論では、当初は華人協

会などが中心となって、例えば賠償問題をどうするかとか、「血債」問題もしくは5千万円献金問題といった具体的な問題が大きく取り上げられた問題だと思います。華人協会は賠償も要求しましたが、日本側は1968年に補償金として29億4千万円相当の船舶および設備資材の贈与を行うことでマレーシア側との賠償問題は片付いたとしています。

ただ華人コミュニティの被害、すなわち戦時中の華人(華僑)虐殺や5千万円の強制的な献金についての賠償はなされていないとして、その後も華人団体は問題としてきたのですが、それではその賠償を日本にいま請求することは現実的ではないとも考えています。

それで、華人協会としては戦略をある程度現実的な形に変えて、華人コミュニティの若者に対する奨学金という形でどうか、それは民間からの支援であろうと国からであろうと、日本人コミュニティから友好的な支援をするという形だったら政治的にも可能でリーズナブルではないかというような提案を1990年代に言っていました。

現在でも同じような提案を言っているかどうかはわかりません。少なくとも華人協会は毎年8月15日の前後に、戦争による被害者の追悼式を行ったり、戦争についての展示やシンポジウムを開くなどのことをしています。

■ 戦争と占領の記憶についての議論はあるも平和教育の形にはなっていない

吉村 そうした中においても、アジアの歴史博物館によくありがちな、日本は占領して酷いことをした、最後に原爆のキノコ雲でアジアの人々は解放されたという単純な図式での提示ではなくて、毎年いろいろな企画をする過程を経て議論を進めています。

戦争の被害については、日本の原爆投下やヒバクシャの問題も学び、戦争や原爆は非人道的だという点で日本の人々ともに議論できないかという観点から、広島平和記念資料館や長崎原爆資料館の方をお招きして原爆投下の被害の展示を行い、一緒に議論をするという形で行った年もありました。そうした華人協会の動きも含めて、さまざまに戦争の記憶や占領の記憶についての記録や議論も行われています。

ただし、シンガポールのように国の文書館が市民の戦争の記憶をオーラル・インタビューとして記録に残すといったプロジェクトはありません。それからマレーシアの教育でもとくに平和教育といった形にはなっていないと思います。戦争での被害などに対し

て、国としては大きく取り上げませんけれども、MCA（政府与党連合の華人政党）や華人団体など、そういうところでの活動というのがあります。

■ BOPを含めて

日本とマレーシアはよきパートナーになりうる

穴沢 私には二つ質問があったと思います。一つは横山さんからの質問で、BOPに対してという話だったと思います。今日は日本の進出の話をしたのですが、日本の企業は基本的にBOPに弱い、これから伸びる大きなマーケットに対して的確に製品を開発して出していける状況になっていないところが多々あります。そして、その際にまあマレーシアですとか、いろいろな途上国との企業との協力というのはどんな製品が本当に必要なのかをセクションするときいろいろなアイデアを共有できる、そういったパートナーになりうるのではないかと考えています。

それからもう一つの質問は、日本とマレーシアの企業のコラボレーションの話でした。いろいろな考え方があると思うのですが、今日の話の続きでいきますと、現在世界中で起こっていることの一つとして、ストラテジック・アライアンスといって、資本関係は持ちませんが、これまで競争していたような企業と可能な部分で協力する、コラボレーションするという方法が、どんどん増えてきています。先程のBOPの話とも関連するのですが、日本の強いところと弱いところ両方ありますので、マレーシアが強くて日本が弱い、日本が強くてマレーシアが弱いといったところがあれば、うまく協力しあうことはこれからのビジネスのやり方になっていくと思います。

■ シンボリックな面での勝負はできない現在 優位性をどう具体的に示すかが重要

川端 私には二つ質問があったと思います。今までルックイーストの中で日本の倫理観に学ぶというシンボリックな側面があって、それなりに有効に機能してきたというところがあったと思います。セカンドウェーブの場合どうするかということですが、まず質問にまっすぐ返しますと、はっきり言ってしまうと、私はもうシンボリックな部分では勝負できないのではないかと考えています。これは日本がどうのという問題よりも、さっき政治の話でカリスマ的リーダー云々という話もありましたが、情報が多様化していますし、それだけでは勝負しにくくなっているのではないかと考えています。

二つの方向性があると思います。一つは、政策の見

地のいわゆるハードの部分、つまり「硬い」という意味の方で、ここはシンボルでは勝負はできません。特に最近のマレーシアの当局の動きを見ているとそう感じます。日本としてどうするかというメリットを、戦略的に、具体的に示す必要があります。そこを預かっていらっしゃる山本課長のお話で日本の優位性を示してやっていくということにはまさに同感です。

マレーシアからすると、日本の相対的な存在感の弱さが見えるというか、もっと日本のプレゼンスを出してほしいということがあります。優位性をどう具体的に示していくのかという問題があると思います。日本人がよく働くことはもうみんな知っている話で、じゃあ何か他にあるのかといったときにぱっと言える人はなかなかなくて、真面目なところが売り物かなぐらいしかないのかなというのがあります。

■ マレーシアの一般の人たちに向けて 日本についての情報発信を続ける

川端 もう一つは、政策のソフト面、つまりもうちょっと柔らかい世界の話です。田村くんに対する返事でもあります。一般の人たちへの情報のインフォームを続けていくことです。オピニオンリーダーを作ることにも関わってきますが、マレーシアから来たプレスの人、日本のことをよく知らないと言います。そういう媒体があまりないと思います。じゃあ媒体を作ってどうなるのか、時間はあるがお金はなかなか出てこないわけです。

企業がする場合は収益性の問題が出てきますが、やったら面白いと思う人はたくさんいると思います。自分でブログやフェイスブックで情報発信する。それはそれで、個人の努力としていいのですが、そこを組織化していないかたちでも何かそういうものができないか。例えばマレーシアの新聞などに日本のことを紹介するコラムを作るなど、このような話はマレーシアでは意外と個人的なコネクションで動いたりするところがあると思うので、既存のところうまく乗って日本とマレーシアを紹介することは一つの例かと思っています。

■ 次代を担う若者のつながりを築くために 学生どうしの交流ができないか

川端 それに関連して、学生さんからの質問があったのでそれと結び付けて答えると、若い人どうしのつながりが大切です。具体的にその国の人を知っていることは強力です。私はビジネスの世界に身をおいているので、仕事では国のイメージで語っています。私は

ASEANを担当していますが、極端なことを言うと、企業の人にはカンボジアもマレーシアも大差ないと見られているところがあります。でも、それはちょっと違うのではないかとあって、具体的にどうかと話をする中では、企業の人でも、「マレーシアに行ったことがある、インドネシアに行ったことがある」という人の中では、その国のインパクトがものすごく強いのです。そういう基本的な印象を踏まえたつながりを大切にすることも、特に若い人にとっては重要です。

逆に考えれば、マレーシアの人でも日本に来たりすればいいんです。それと関係させて、学生の交流を作っていけないかなということも考えています。ちょっとプライベートな話になりますが、私の出身の東京外国語大学の現役生や卒業生の関係も足がかりにして、マレーシアとの関係を築くつながりを作っていけないかなと考えています。私が1人でできることはありませんので、学生のみなさんもぜひ協力してください。

■ ルックイースト政策と イスラムとの関連についての発想があった

吉村 いろいろご質問をいただいた中で、二つまだほかの方も答えていない質問もあるかと思いますので、お答えします。まず、富沢さんからご指摘いただいた思想史的にどうかという点ですが、正面からお答えすることはできませんが、日本的な企業倫理、勤労倫理というのは、マハティール元首相の強力なリーダーシップということから、それなりに根付いたところがあると思います。

ただ、イスラムの金融やビジネスというものがある程度注目されている中で、イスラムイコールビジネス的にだめだというのが前にあったと思います。例えば利子を取って儲けてはいけないとか、イスラムはビジネスにはそぐわないという見方が強かったかと思いますが、最近は見直されて違ってきているのではないかと思います。マハティールのルックイーストやアジア的価値といった考え方には、イスラムとどう関連するか(もしくはどう関連させるか)という発想もあったと思います。

■ マレーシアの大学は 留学生の受け入れも含めて国際化に積極的

吉村 もう一つ、小野真由美さんが質問なさった、それではマレーシアの大学での日本人の比率が上がることは問題はないのかという点ですが、今のマレーシアの大学は外部評価やランキングの観点からも国際化に非常に積極的です。学生やスタッフも含めて国際

化をどう進めるかということに対して積極的に取り組んでいますので、留学生は歓迎されています。ですから、正規のプログラムも留学生向けの語学コースも含めて、留学生の受け入れについては非常に積極的だと思います。それから、ご質問の背景にあったのはいわゆるマレーシアのNEP(新経済政策)による国立大学の入学学生数におけるエスニック比率かと思いますが、それも撤廃されています。

司会 これだけルックイースト政策に特化して議論ができるのはJAMSにおいて日本には他にないと再確認しました。報告者の方もフロアの方も含めて、今日はかなりテーマを絞った議論ではありましたが、非常に実りのあるセッションになったと思います。これからセカンドウェーブの東方政策に向けて実りある方向に進んでくれることを祈りながらこのセッションを閉じたいと思います。